表紙解説

水の子島と灯台

真柴茂彦
（佐伯市中の島三丁目）

今年は水の子灯台が出来て百周年になる。町で記念の行事が企画されている。それに先立ち、七月六日、鶴見町の教育委員会と文化財調査委員が海上保安署の職員と共に水の子に渡るというので、河野事務局長と同行させてもらった。

水の子島は鶴御崎の北東一五kmにある周囲三二〇m、最高点二〇mの小島である。佐伯から二八km。東経一三二度一〇分、北緯三三度三分、豊後水道の中ほどに位置する。草木も生えないといわれるがハマオモト、ハマボス、ボタンボウフウなど岩場にわずかにみられる。

昔話によれば、海の真ん中にあるため宇和島藩との間に島の帰属をめぐり話がつかなかったとき、お上の裁量で、一番鳥の声を合図に舟を漕ぎ出し、先に着いたほうが領土にして良いということになった。佐伯藩側は篝火を焚き早く鳥を鳴かせて舟を出し、先に着いたという。

水の子灯台

古くは元禄十一年十二月に幕府命により提出した佐伯領絵図に

覚

一、水の子島　しばへ

右　毛利駿河守領分に而御座候以上

寅十二月十六日　毛利駿河守内　福泉九郎左衛門

長瀬六左衛門　殿

高木佐左衛門　殿

とある。

この島に明治三四年三月灯台の建設が起工、三七年三月竣工、山口県徳山から花崗岩を運び、コンクリートの砂は間越（はざこ）のものを使ったという。逓信省の管轄でバビエー式石油蒸発白熱灯による六十八万八千カンデラの日本有数の規模である。

戦時中はグラマンの攻撃を受け、昭和二十年五月から一年間灯が消えた。現在も灯台までの階段、灯台の花崗岩の側壁、灯台の頂上部分の床や階段などに弾の跡が生々しく残っている。

昭和二十五年十一月、自動制御ガソリンエンジン二基、九十万カンデラとなった。昭和二十八年より佐伯航路標識事務所が発足し、交代職員が使っていた下梶寄の退息所が廃止となり、職員の交代は巡視船によることになった。昭和六十一年には完全自動化により、灯台は無人化され十五日ごとの見回りとなっている。

現在、波力発電機五基と太陽電池などにより灯台は動いている。二〇〇四年四月から大分海上保安署の管轄になった。

幸い波もなく快適な水の子訪問であった。十一月七日（日）には鶴見町の「水の子灯台遊覧体験」が佐伯を基点に計画されている。

波力発電気